**四季耕作図、久隅守景（1600年代）作**

江戸時代（1603-1867）の庶民の風習を四季折々に描いた一対の屏風である。この屏風は、17世紀の画家・久隅守景（1620年頃－1690年頃）が制作したもので、それぞれ6面で構成されている。久隅はもともと名門・狩野派に属していたが、その後、日本の農村生活を描いた独自の画風を確立した。

中国美術において、農村の生活を描いた絵は特殊なジャンルであった。天皇が労働する民衆を思いやるためのものであった。室町時代（1336-1573）にこのジャンルが日本に伝わると、一般的なテーマだけでなく、中国の風景や衣服、風習なども再現された。久隅の「四季耕作図」は、中国から日本へ舞台を移した点で独創的であった。この屏風に描かれている風景、建物、活動などは、いずれも17世紀の日本を描写している。

また、この作品のユニークな点は、季節が左から右へと順番に描かれていることだ。日本の文字、絵巻物や屏風絵は、右から左へ見るのが伝統的な見方である。この作品では、季節の順序を逆にして、左から春、そして右に冬を描いている。